

【 復活のトロパリ 第3調 】



てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの  
天在者樂、地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら  
悦主其臂力顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復  
死以死滅

くかつのはじめとなあり、われらをぢごく  
活首我等地獄

のはらよりすくうい、せかいにおおいな  
腹救世界大

るあわれみをたまいたればなり。  
憐賜

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使徒等同座者、忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
實神智役者、聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
神撰笛愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満器我國光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
照お者、亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

【日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調】

こうえいはちちとこおとせいしんにき  
光榮父子おと聖神歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾は初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光暖ながし、爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬神子爲あし、彼等神

みの おんちようを あた え、ハリストスのきょうか いを たて  
 恩 寵 與 教 會 建  
 た り、いまこのきょうか いのた めにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 た ま あ え、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第3調 】

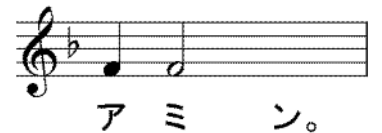
いまあもいつもよよおに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 じれんなるしゅよ、なあんぢは いまはかよりふ  
 慈 憐 主 爾 今 墓 復  
 くか つして、われらをしのもんよりのぼせ  
 活 我 等 死 門 升  
 た ま えり。いまアダムはたのしみ、  
 給 今 樂  
 エヴァ はよろこおび、しよよげんしゃはれつそとと  
 歡 諸 預 言 者 列 祖 偕  
 も に たえ ずなんぢのけんぺえいの しんせい  
 絶 爾 權 柄 神 聖



なるのうりょくをほめうとおおう。  
能力讃歌

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、



アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖神聖勇毅聖  
じゆうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常生者我等憐  
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖神聖勇毅聖

なるじょうせいのもよ、われらをあわれ  
常生者我等を憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖神聖勇毅  
せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐  
れめよ。こうえいはちとことせいしん  
光榮父子聖神  
にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
歸今何時世世  
せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐  
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
聖神聖勇  
き、せいなるじょうせいのもよ、われらを  
毅聖常生者我等を  
あわれめよ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>わ かみ うた うた</sup> プロキメン、我が神に歌い歌えよ、<sup>わ おう うた うた</sup> 我が王に歌い歌えよ、

わ が か み に う た い う た え よ 、 わ が お 王  
我 神 歌 歌 我 王  
う に う た い う た え よ 。  
歌 歌

誦經) <sup>ばんみん て う よろこび こえ もつ かみ よ</sup> 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わ が か み に う た い う た え よ 、 わ が お 王  
我 神 歌 歌 我 王  
う に う た い う た え よ 。  
歌 歌

誦經) <sup>わ かみ うた うた</sup> 我が神に歌い歌えよ、

わ が お う に う た い う た え よ 。  
我 王 歌 歌

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 93 端 ロマ書 6 章 18~23 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい なんぢら つみ と ぎ ぼく な なんぢら にくたい よわ よ われ</sup> 兄弟よ、爾等は罪より釋かれて、義の僕と爲れり。爾等が肉體の弱きに因りて、我

<sup>ひと じょう したが い なんぢら かつ そのしたい ふけつふほう ぼく な ふほう ゆだ</sup> 人の情に循いて言う、爾等が曾て其肢體を不潔不法の僕と爲して、不法に委ねし

<sup>ごと か いまなんぢら したい ぎ ぼく な せいせい ゆだ けだしなんぢら つみ ぼく と き</sup> 如く、斯く今爾等の肢體を義の僕と爲して、成聖に委ねよ。蓋爾等罪の僕たりし時

<sup>ぎ と もの そのときなんぢら なん けっかあ いまみづか は ところ しわざ</sup> は、義より釋かれし者たり。其時爾等に何の結果有りしか、今自ら耻づる所の行爲な

<sup>けだしそのおわり し しか いまなんぢら つみ と かみ ぼく な と き なんぢ</sup> り、蓋其終は死なり。然れども今爾等罪より釋かれて、神の僕と爲りし時は、爾

ら けっか せいせい そのおわり えいえん いのち けだしつみ むくい し かみ たまもの  
等の結果は成聖なり、其終は永遠の生命なり。蓋罪の報は死なり、神の賜はハ

リストス・イイスス われら しゅ よ えいえん いのち  
リストス・イイスス我等の主による永遠の生命なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あなたがたは罪から解放され、義の僕となった。わたしは人間的な言い方をするが、それは、あなたがたの肉の弱さのゆえである。あなたがたは、かつて自分の肢体を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥ったように、今や自分の肢体を義の僕としてささげて、きよくならねばならない。あなたがたが罪の僕であった時は、義とは縁のない者であった。その時あなたがたは、どんな実を結んだのか。それは、今では恥とするようなものであった。それらのものの終極は、死である。しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え、きよきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである。罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

\*\*\*\*\*

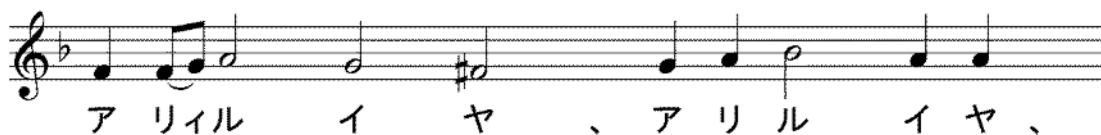
【 アリルイヤ 主日第3調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

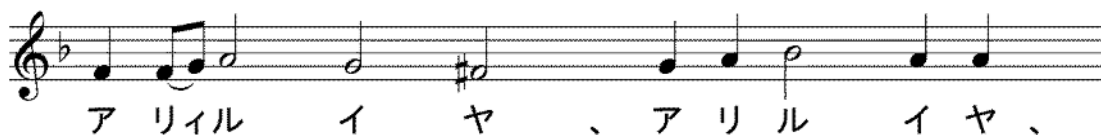
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え</sup> 主よ、我爾を恃む、願わくは我世に羞を得ざらん、



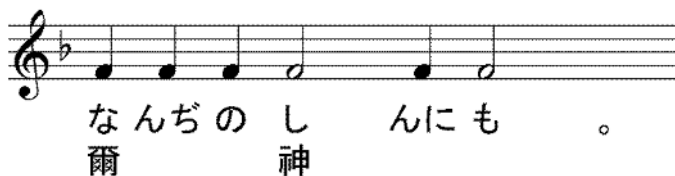
誦經) <sup>わ ため けんご かくれが われ つね かく え たま</sup> 我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給え、



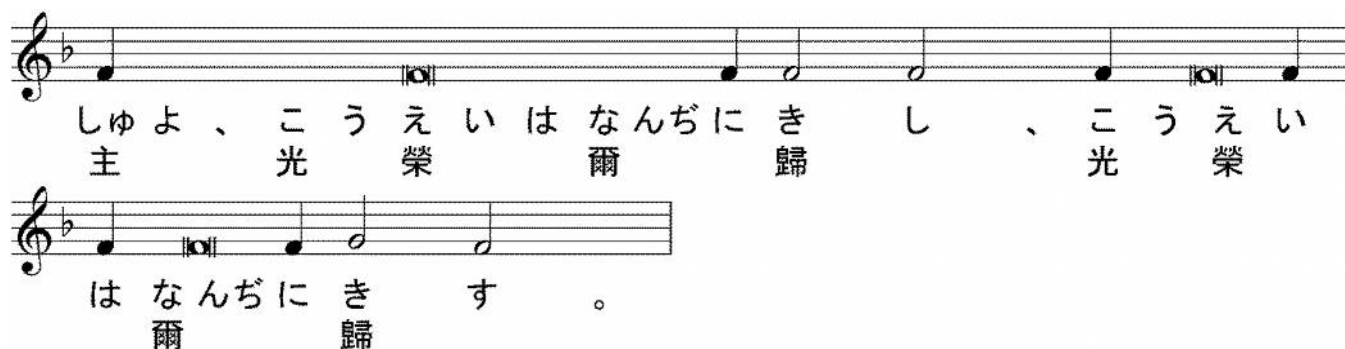
司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup>人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の <sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup>浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる <sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup>誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所 <sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup>を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、 <sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup>爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし <sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup>て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書25 端8 章5~13 節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup>睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き か ととき い ととき ひやくふちようかれ つ もと</sup>謹みて聴くべし、彼の時イイス、カペルナウムに入りし時、百夫長彼に就きて、求

<sup>い しゅ われ ぼくちゅうぶう いえ ふ くるし はなはだ かれ い</sup>めて曰えり、主よ、私の僕癱瘋にて家に臥し、苦むこと甚し。イイス彼に謂う、

<sup>われゆ これ いや ひやくふちようこた い しゅ なんぢ われ いえ い われあた</sup>我往きて之を醫さん。百夫長對えて曰えり、主よ、爾が私の舎に入るは、我當ら

<sup>ただいちごん いた しか わ ぼくい けだしわれひと けん ぞく わ した へいそつ</sup>ず、唯一言を出せ、然らば我が僕愈えん、蓋我人の權に屬すれども、我が下に兵卒



ありて、我<sup>われ</sup>此<sup>これ</sup>に往<sup>ゆ</sup>けと云<sup>い</sup>えば往<sup>ゆ</sup>き、彼<sup>かれ</sup>に來<sup>きた</sup>れと云<sup>い</sup>えば來<sup>きた</sup>り、我<sup>われ</sup>が僕<sup>ぼく</sup>に是<sup>これ</sup>を 行<sup>おこな</sup>えと云<sup>い</sup>えば  
 行<sup>おこな</sup>う。伊<sup>これ</sup>スス之<sup>き</sup>を聞<sup>き</sup>きて奇<sup>な</sup>と爲<sup>な</sup>し、從<sup>したが</sup>う者<sup>もの</sup>に謂<sup>い</sup>えり、我<sup>われ</sup>誠<sup>まこと</sup>に爾<sup>なんぢ</sup>等に語<sup>つ</sup>ぐ、伊<sup>つ</sup>ズライ  
 りの中<sup>うち</sup>にも、我<sup>われ</sup>是<sup>か</sup>くの如<sup>ごと</sup>き信<sup>しん</sup>を見<sup>み</sup>ざりき。我<sup>われ</sup>又<sup>また</sup>爾<sup>なんぢ</sup>等に語<sup>つ</sup>ぐ、衆<sup>おお</sup>くの者<sup>もの</sup> 東<sup>ひがし</sup>より西<sup>にし</sup>より來<sup>きた</sup>  
 りて、アヴラアム、イサアク、イアコフと偕<sup>とも</sup>に天<sup>てん</sup>國<sup>ごく</sup>に席<sup>せき</sup>坐<sup>ざ</sup>し、而<sup>しこう</sup>して國<sup>くに</sup>の諸<sup>しよ</sup>子<sup>し</sup>は外<sup>そと</sup>の幽<sup>くら</sup>暗<sup>やみ</sup>  
 に逐<sup>お</sup>われん、彼<sup>かしこ</sup>處<sup>な</sup>には哀<sup>はが</sup>哭<sup>み</sup>と切<sup>また</sup>齒<sup>ひやく</sup>とあらん。伊<sup>い</sup>スス又<sup>また</sup>百<sup>ひやく</sup>夫<sup>ふ</sup>長<sup>ちやう</sup>に謂<sup>い</sup>えり、往<sup>ゆ</sup>け、爾<sup>なんぢ</sup>の信<sup>しん</sup>ぜ  
 し如<sup>ごと</sup>く 爾<sup>なんぢ</sup>に爲<sup>な</sup>るべし、斯<sup>こ</sup>の時<sup>とき</sup> 其<sup>その</sup>僕<sup>ぼく</sup>愈<sup>い</sup>えたり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがカペナウムに帰ってこられたとき、ある百卒長がみもとにきて訴えて言った、「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」。イエスは彼に、「わたしが行ってなおしてあげよう」と言われた。そこで百卒長は答えて言った、「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも權威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいて、ひとりの者に『行け』と言えれば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えれば、してくれるのです」。イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。なお、あなたがたに言うが、多くの人々が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ